
多摩川上下流交流活動

～中川金治翁を中心に～

(1) 源流域崩壊の危機

文化研は、「前史」に触れたように1986年に着手した“多摩川における下水文化の歴史の変遷に関する実証研究”を基礎に組織された。このため、発足当初から“多摩川上下流の住民交流の活性化”は、最重要課題であった。

多摩川は、小河内ダムのある東京都奥多摩町が最上流ではない。源流域は、小河内ダムの上流・山梨県側に広がっている。多摩川は、源流域では丹波山村を貫流する丹波川となり、その上流で一之瀬川や柳沢川など幾つかの支川に枝分かれする。小菅村を貫流する小菅川は、丹波川の支流で、大菩薩に発する。多摩川の最上流の源頭の山は笠取山で、その直下に「水干」があり、水神様が祀られている。「水干」とは、「山頂直下で、かつ沢の最上流に位置し、山頂に降った雨水の最初の一滴が地表に現れる多摩川の源」の意である。

源流域は、最上流の甲州市一之瀬高橋や落合地域、その下流に繋がる丹波山村、そして支流域の小菅村からなる。その特殊性は、森林の相当部分が東京都の水道水源林として東京都水道局の管理下にあることである。私有林が無いわけではないが、林業で生計を立てることは現在では難しい。

集落は、街道沿い、水道水源林の中、あるいはそれに隣接しているが、全て限界集落である。青年層の多くは、生活の場を源流域の外に求めている。

(2) 『沈黙の森』の悲惨

村人は、林道や河川の維持修繕などの土木作業、東京都水道水源林の維持管理作業などに従事し、さらにワサビの栽培と加工販売、キャンプ場や登山客相手の民宿経営、山女の養殖やキノコの栽培、猪や鹿などの狩猟、山の幸の採集、山腹を切り拓いた畑での農業などで生計を立てている。しかし、源流域の人口は、急速に減少している。この地の生活には、将来性がない。中学校までは地元の学校に通学できるが、高校で学ぶためには源流域から出なければならない。医療体制も入院加療を要する場合は、源流域の外になる。その場合、丹波山村や小菅村では東京都下の青梅などである。落合など最上流部の場合は、甲州市になるようである。つまり、源流域の大部分は、行政は山梨県だが、生活は東京都を向いている。しかも、訪れる人達の大部分は、東京都民である。源流域は、山梨の行政力と東京の生活力の二つの力で引き裂かれる状態である。これでは、高齢者はともかく、次代を担う青年達が東京都内や甲州市内に居を移すのも当然である。このまま推移すれば、源流域から山村の姿が消える日も早晚来る。そうなったら、どんな事態になるのか。例えば、山林火災が起こっても、消火に当たる山村民がいない。山林が荒れても林業に習熟した人がいない。林道が崩れても補修する人がいない。東京都水道水源林管理事務所の職員だけで広大な源流域の森林を守るこ

となど不可能である。源流域から山村民の姿が消えた時は、『沈黙の森』が現出する時。森林が原生林に戻ったと喜ぶべきではない。原生林は、人間と共生出来ない。

森林に山村民の笑い声が絶えず、逞しい生活力が息づく『共生の森』が再生できた時こそ、源流域は守られる。源流域を『共生の森』に変えるために、上下流交流は絶対要件なのである。

私の脳裏には、今なお曾根良一氏の“源流を「沈黙の森」にしてはならない”と言う言葉が刻まれている。曾根氏は、既に故人だが、最上流の「落合の主」のような人物で、笠取山登山会会長であった。生涯を落合の水道水源林管理事務所の職員として過ごした曾根氏は、源流域の森林の隅々まで知り尽くしていた。私は、曾根氏から水源林が優れて合理的な構造物として設計され、造成されていることを教えられた。森林を守るためには、人間の力が必要で、その力を涵養するには森林と共生する山村の暮らしが不可欠である。

(3) 多摩源流の森と水を守る宣言文

文化研は、小菅村の加藤亀吉村長（故人）と相談し、丹波山村及び奥多摩町に呼び掛け、1990年5月4日、小菅村恒例の“多摩源流祭”の特別企画として同村中央公民館で『多摩源流の森と水を守る』をテーマに多摩源流シンポジウムを開催した。参加者総数は、およそ200人。予想以上の盛況で、多摩川下流からは東京都議会議員や東京都水道局長などが参加した。このシンポジウムの最後を飾って、宣言文が決議された。要点は、下記の通り。

- ① 源流地域は、多摩川に残された真の多摩川である。
- ② 「源流地域の森と水の保全」と「地域振興」は両立するものでなければならず、この意味で多摩川（の上下）流域は運命共同体である。
- ③ 源流地域は行政境界の存在に関わらず一体であり、相互に協力する。

文化研は、この決議の起草に努力を惜しまなかったが、宣言が発せられても、実質的には3町村による基本的意志の確認に止まり、実質的で有効な統一行動が起こったわけではない。

文化研の中で多摩川流域の上下交流の活性化を願うグループは、「どうすれば良いか」と、シンポジウム開催後5年余り模索し続けた。

(4) 源流域の村民気質

小菅村は、シンポジウム開催後、源流域の存在意義を機会ある毎に下流域に訴え、都民に向けて源流の魅力をアピールした。

“多摩源流祭”は毎年5月4日に開催され、大菩薩から降って来た（という触れ込みで登場する）山伏が点火する巨大な「お松焼き」が評判になって、東京から大勢の人が押し寄せるようになった。小菅村民は、エネルギーがあり、良い意味で才覚に富んでいるようだ。小菅村は源流域の一角ではあっても、小菅川は多摩川の支流である。だが、敢えて“多摩源流”と名付けるところに、小菅村民の気質が透けて見える。源流域の村民気質は一色ではない。小菅村民を外向的と評すれば、丹波山村民は、内向的であるようだ。前者を商人的と言え、後者は野武士的と評することも出来そうだ。

源流域は、古い日本の歴史を幾層にも留めている。幾つかの特定の姓が多く、例えば「船木」は、先祖を辿れば、奈良時代、蝦夷討伐に向かった坂上田村麻呂大將軍の軍勢に属した兵士の出身で、その遠祖は三重県であつたらしい。

あるいはまた、平将門の軍勢に属した武門の家系もある。「木下」姓の人は、敗戦によって多摩山中に隠れ、定住した一族のようだ。玄関に磨き込んだ木刀が飾ってあったりする。源流域の山村民は、それぞれ波乱に富んだ歴史を生きて来たのである。落合の主・曾根氏の言動には江戸時代がまだ留まっているように思える時があった。例えば、自分は「落合」を支配しているが、「丹波山村」は丹波山村民が支配しており、その支配は絶対だと言うような言動である。こうした言動は、丹波山村民の潜在意識を構成し、その結果が「内向的に見える」のであろう。特に丹波山村は、武田信玄の財力の源泉になった「黒川金山」の側近く、小菅村とは違って、かつての街道沿いから離れた位置にある。縄文時代から集落が形成されていた村落だが、ある種の隠れ里のようでもある。丹波山村民の心を捉えることは、至難と言える。だが、この至難を乗り越え、村民の心を得た人物、それが「中川金治翁」であった。

(5) 丹波山村民の心を捉えた中川金治翁

私達は、実証調査の早い段階で源流域の何人かの古老から「中川金治翁」という名前を聞いていた。丹波山村の古老は、中川金治翁を「山の御爺」と呼び、「山になったお爺さん」と敬っていた。現に村民は、昭和10年（1935年）サオラ（棹裏）峠の富士山が見える景勝の地に木製の祠を造り、中川翁を「生き神様」、「大山祇中川大人之命」として祀った。小河内ダムの用地交渉が進んでいた頃である。祠は、30年後に建て替えられたが、その後は放置されたままだった。

古老達は、朽ちて行く祠を前に悩んでいた。仮に自分達が立て替えたとしても、村は、いずれ消えて無くなる。無理をして再建しても、祠は朽ち果て、この世から姿を消すだろう。古老たちの心の底には、深い悲しみが潜んでいた。

だからだろうか。私達が中川翁の話聞かせて欲しいと頼むと、皆一様に楽しげな笑顔になって言ったものだ。

「子供の頃、中川さんの後ろを“山の御爺、山の御爺”と言って、ついて回ったものです。東京に出られると、帰って来る日が待ち遠しくて、下流の方ばかり見ていたものです。リュックは、いつも絵本や童話の本でいっぱい。それを一人ひとり“良い子になれよ”と頭を撫でながら、渡してくれるのです。」

そればかりではない。中川翁が主導した泉水谷の造林作業で林業夫達が歌った『泉水谷の歌』が今でも昔を偲んで歌われることがある。

歌詞は六番までであるが、一番と二番の歌詞を紹介しよう。

「一、雲にそびえる大菩薩、北に輝くトサカ山／山と山とに抱かれて、その名も清き泉水は／奥多摩川の一支流

二、花の都の水源池、海拔五千余百尺／卯月なかばに雪消えず／夏なお寒き谷の底

(以下略)」

林業夫達が「如何に水源林造成を誇りにしていたか」が伝わって来るようだ。中川翁は、村人に生業を提供し、仕事の誇りと喜びを伝えた。そして、山村民が源流域で生計が立てられるよう様々な工夫、例えば山葵の栽培、林道や砂防の整備等の仕事の世話を焼いた。源流の森林を守るためには、山村の人々が定住し、森林保護に誇りを持って取り組むことが絶対的に必要である。

上下流交流が何故必要なのか。答えは、只一点ではないか。即ち、源流に定住する山村民が幸せに生活し、源流域の保護に誇りを持つることである。

(6) 中川金治翁とはどんな人物だったのか

文化研の上下流交流問題に関心を持つ会員は、中川翁の存在を知ると、一様にある種の憧れを抱いた。そして、その足跡を辿りたいと思った。私もその一人だったことは言うまでもない。どんな人物だったのだろうか。

私は、黒川鶏冠（トサカ）神社に奉納された扁額の片隅に書かれていた住所から中川翁の故郷を知った。中川翁は、岐阜県宮川村（当時は坂下村）の山林地主の旧家に明治7年（1874年）4月生まれた。江戸時代、富山藩主の前田公から苗字帯刀を許されていたというから、中川家は富豪で、かつ大山林地主であった。中川翁は、生粋の林業家として育ったが、青雲の志を抱いて明治34年（1901年）、27歳の時に上京し、帝国大学農科大学千葉演習林の篤志林業夫になった。

中川翁は、そこで林学部の本多静六教授に出会った。その頃、東京市水道水源林の造成に情熱を燃やしていた本多教授は、中川翁の林業家としての手腕を認め、中川翁に奥多摩入りを強く勧めた。中川翁は、本多教授の熱心な勧めに動かされ、明治35年（1902年）多摩源流域に入ったのである。

私は、中川翁の故郷を訪ねて驚いた。そこは、「多摩川源流域と瓜二つと言えるほど似ていた」のだ。「中川翁は、多摩源流域に自分の故郷を見たに違いない」と、私は確信した。中川翁は、奥多摩入りを果たしてから昭和10年（1935年）まで実に33年間、単身山中にあって水源林造成を指導したのだった。落合の古老曾根良一氏（故人）は、東京都の水源林事務所の職員として水源林を隈なく歩き回り、中川翁の造林法を実地に学んだ。

その曾根氏が私にこう話した。中川翁を心から尊敬する人ならではの言葉だ。

「林業は、長い時間の必要な仕事です。山を愛し、少なくとも20年以上に亘って一カ所で仕事をするのが真の林業家。中川さんは、自分の故郷飛騨の山をこの多摩川源流に置き換えて、頑張られたのでしょ。」

「水源林の造成は、木を植えれば良いと言うものではありません。森林として成長した後々までを見通した長期に亘る周到で綿密な配慮の下に設計されるものなのです。庭園の設計より人目に触れない分、もっと難しいでしょう。」

本多教授が設計した神宮の森は、このような配慮の下に設計されたと言われる。そこに師弟の間に流れる共通した精神を読み取ることが出来るだろう。そして私は、同時に“どろ亀さん”の異名で慕われた東大名誉教授で、富良野の北海道演習林の主・高橋延清教授と同じ精神と息遣いを感じる。

文化研の同憂の士は、中川翁の中に上下交流の真髄を見たのだが、今という時代に果たして何をすれば良いのだろうか。そして、私達に何が出来るのだろうか。それは、誠に難しい課題であった。

(7) 「水と森と食の祭典」、そして「中川金治翁を偲ぶ会」

多摩川上下流交流活動の先頭に立ったリーダーの一人が藤森（正法）さん。

藤森さんは、文化研創設時のメンバーで、中川翁を知った最初からその人物に深く傾倒した。藤森さんは、長野県穂高町出身で、山歩きをこよなく愛したから、“山人”としての中川翁を誰より

も理解できたのだろう。

藤森さんは、当時、東京都下の稲城市の下水道課長で、彼の率いる職員の中に小菅村の加藤亀吉村長の息子さんがいた。加藤村長は、林業経営に造詣が深く、一家言の持主であった。小菅村主催の“源流祭り”は、元を糾せば中川翁とも無関係ではないが、加藤村長が新たな形で発足させたものと言っても過言ではない。藤森さんは、加藤村長を心から敬愛し、肝胆相照らす関係を築いた。

文化研と小菅村の関係もまた、緊密なものとなったことは言うまでもない。

藤森さんは、学生時代、自動車部キャプテンで、大型バスでさえ自由に運転できる名ドライバーであった。藤森さんは、毎年5月4日の“源流祭り”に参加するため大型のレンタカーを借り、文化研はじめ多摩川下流域の市民団体に参加を呼び掛けた。文化研は、必要経費を支援し、「多摩川上下流交流活動」の恒例行事となった。この行事は、小菅村の“源流祭り”に参加するだけでなく、多摩川源流の笠取山登頂と中川翁が運び上げた「水干」の探訪、中川翁が鶏冠神社に奉納した「金の御幣」の拝観、そして夜は「山の御爺と慕われた中川翁の人となり」を聞き、村人と歓談する会等を催した。いわば“中川翁ツアー”だった。文化研は、藤森さんを中心に、この行事を2001年まで毎年続けた。

当時、文化研の運営委員だった筆者と監事だった藤森さんの二人には、源流地域振興のため2002年を期して実現したい提案があった。二人は、小菅村の「多摩川源流研究所」の中村文明所長と“如何に実現するか”を相談した。

提案内容は、2002年秋に「水と森と食の祭典」を多摩川源流の4自治体共催で開催しようというものだった。2002年は、中川翁の「奥多摩入り百年」の節目の年で、翌2003年3月には京都で「第3回世界水フォーラム」開催が予定されていた。社会に広く「森と水の関わり的重要性と源流域の産業と文化の振興の必要性を訴える」好機と思えたのだった。

中村所長の努力によって、多摩川源流4市町村、即ち東京都側の奥多摩町、山梨県側の塩山市、丹波山村、小菅村が「多摩川源流協議会」を結成する運びとなり、「水と森と食の祭典実行委員会」が結成された。こうして「祭典」は、2002年10月19日は小菅村中央公民館で、翌20日は小菅の湯周辺広場、村営釣り場で開催されたのだった。

恒例の“源流祭り”は小菅村主催で、開催月日は5月4日だが、この祭典は源流4市町村参加の下、秋の10月開催である。文化研は、この祭典の実行委員会の呼び掛け団体及び協賛団体となったが、多摩川上下流交流を現実的に前進させられたことで大いに満足であった。しかし、「祭典」が小菅村主導となったことは否めない事実であった。

文化研は、この祭典とは別に2002年9月14日、「中川翁奥多摩入り百年」を記念して、丹波山村及び塩山の落合地域の関係者と相談し、『中川翁を偲ぶ会』を開催した。この偲ぶ会には、文化研からは谷口尚弘、斎藤博康、藤森正法、中村隆一（故人）と筆者の5名が参加した。偲ぶ会は14日午後2時文化研の5名と地元の木下さん、岡部さん、熊野神社の神主守岡さんの総勢8名が海拔1000メートルの登山口を出発し、海拔1200メートルの山王沢まで登った。

神主の守岡さんは途中で足を痛めたため、これ以上の登山は困難と判断し、ここで中川大人之命の霊を呼び寄せることになった。神主の守岡さんは、棹裏峠の中川神社に向かい、命の霊を呼び寄せた。筆者は、その瞬間、一陣の風が森林をどよめかせ、異界の空気が漂うのを実感した。

私達は、一人一人、玉串を捧げ、守岡さんが祝詞を奏上し、お神酒をいただいた。帰途に就く守



岡さんを見送った後、私達は急峻な山道をよじ登り、海拔 1414 メートルの棹裏峠にたどり着いた。この間、先頭に行く斎藤さんの前を鹿が突然横切り、リスが顔を出すなど、これまで経験した事のない大自然を実感した。私達は、棹裏峠の景勝の地に建立された中川神社を参拝し、藤森さんが「般若心経」を唱えた。時刻は、既に午後 5 時を回っていた。

午後 7 時から直会(なおらい)が催された。参加者は、約 20 名。当時病床にあった船木喜久郎氏(小菅村出身)夫人のメッセージ、本多静六博士の故郷埼玉県菖蒲町教育委員会からのエールが紹介され、藤森さんの『中川神社維持基金』の趣旨説明の後、同基金が偲ぶ会発起人代表の伊藤巖氏(丹波山村)に贈呈された。文化研は、中川翁の水源林に対する深い思いが未来に継承されることを願って基金に 10 万円を拠出した。

その後、文化研の中村さんの司会で、地元の古老や猟友会の人達から中川翁のエピソードが紹介され、歓談は夜遅くまで続いたのだった。

文化研の最大の願いは、「祭典」と「偲ぶ会」が源流4市町村共同で開催されることであった。しかし、結果的には、「祭典」は小菅村中心、「偲ぶ会」は丹波山村中心となった。文化研としては残念な結果であったが、文化研の希望が一挙に適う訳もない。

私達の心に響いたのは、丹波山村の古老たちが「中川神社の改築に当たって、祠を木造から石造にしたい」と考えていたことだった。木造で再建すれば30年も経てば朽ちる。その時、果たして再建の担い手の子孫が残っているだろうか。古老の誰一人、自信が無かった。石造にすれば、今後500年、600年と半永久的に風雪に耐えるだろう。古老たちは、「何とかして石造にしたい」と考えていたが、資金提供を強要できる訳もない。

中川翁を上下流交流の象徴と見なしていた私達は、下流側の人々が中川神社の石造化に資金面で協力できないかと考えた。こうして、文化研が中心になって、下流域の人々に「中川金治翁石祠建立募金」を呼び掛けることになった。

(8) 中川金治翁の石祠建立

筆者の脳裏から源流の山人有志が昭和10年(1935年)に「何故生き神様として中川翁を祀る祠を建立したのか」という疑問が去らなかった。この疑問は、「昭和10年頃、小河内ダム建設の地元交渉が難航していた」事実を知って、何となく解けた気がした。中川翁は、水源林を守るために、源流域の山人の生活に細々と心を配った人であった。山人有志は、中川翁の退職の日に合わせて、源流域の真中で、富士山が一望できる棹裏峠の景勝の地に祠を建立した。

彼等は、中川翁と重ねて自分達の気持ちを首都の都人、ひいては天皇陛下に示したかったのではないだろうか。そこには、「源流域の山人の生活を犠牲にしたのでは、流域の水は守られない」という切実な訴えが潜んでいるのではないか。筆者は、だからこそ「中川翁は、流域の上下流交流の象徴であり、その思いは未来に継承されるべきだ」と考えたのだった。

木祠を石祠に代えるには、二つの問題があった。「石祠を造る石工の確保」と「資金の調達」である。石工には心当たりがあった。

筆者は、当時大阪経済大の教員だった。筆者のゼミ卒業生の中に滋賀県長浜市で手広く石材商を営む竹原教男君がいた。竹原君は、誠実な人で、大阪経大の経済学部を卒業後、愛知県岡崎市にある石工専門学校で技術を習得し、老舗の石工店を継いでいた。滋賀県の石工の技術は、わが国でもトップ・クラスと聞いていた。そこで、直ぐ竹原君に電話し、協力を取り付けた。竹原君は、資金は100万円用意できれば充分との判断であった。

私達は、上流側4人、下流側10名からなる「中川神社再建委員会」を発足させた。代表は上流側から丹波山村の伊藤巖氏、副代表は下流側から藤森さんが就任し、募金目標額を100万円、石祠奉納式の目標期日を2003年(平成15年)11月23日と決めた。

建設資金は、多摩川下流域の人々の拠出金に頼ることが趣旨に適うことは言うまでもない。私達は、「中川神社再建趣意書」を作成し、文化研の会員に広く募金を勧誘した。また、文化研の賛助会員企業にご協力をお願いして回った。さらに、文化研のホームページに趣意書を掲載し、文化研の会員以外の方々のご協力もお願いしたのであった。

趣意書では「募金」と言わず、敢えて「喜捨」を使い、石祠に収めるタイムカプセルに協力者の芳名帳を収め、喜捨一万円以上の方は名前をステンレス製の銘板に刻み、台座に取り付けることにした。

募金は、順調に進み、応募者は79名、金額は目標を上回る約140万円に達した。石祠の製作は、竹原君によって進められ、予定期日前に棹裏峠に据えられた。最大の難問は、「丹波山村から峠まで標高差約500メートルの間を如何にして運び上げるか」と言う問題。石祠の総重量は約575キログラム。ヘリコプターによる運搬も検討したが、予算的に不可能だった。

解決策は強力（ごうりき）が背負って運び上げる方法である。だが山間地でも現在、50キロの荷物を背負える強力がない。そこで、石祠を20個のピースに分割し、地元の建設業者の応援を得て、「棹の裏」と例えられる急峻な山道を担ぎ上げ、峠の上で組み立てることになった。山人の篤い思いが無い限り、この労働に耐え得るものではない。石祠は、白御影石造りで、予定した景勝の地に見事に組み立てられ、台座には喜捨された方々のお名前を刻んだステンレス板が付けられ、祠の内部には芳名帳が収められた。何百年か先に、誰かが芳名帳を見て、感慨に耽るかもしれない。

なお、石祠建立経費を除く募金残金は、『中川神社維持基金』に繰り入れられ、今後の石祠の保存費用に当てられることになった。文化研の上下交流活動は、一つの実を結んだのであった。

(9) 石祠建立の祝賀会と「偲ぶ会」の上下流共催

石祠建立祝賀会は、2003年11月23日正午、神官が身を清め、正装して石祠に注連縄、神前にお神酒を備えた後、礼拝、散米、古い木祠からの昇神の儀、新しい石祠への降神の儀、祝詞、玉串奉奠、参加者全員による黙祷などが滞りなく行われた。終了直後、地元猟友会有志が猟銃で祝砲を二発発射。銃声は、全山に轟き、行事終了を伝えた。鹿が二頭、林から驚いて飛び出し、参列者が見守る内に姿を消した。まさに、異界の雰囲気である。

祝賀会は、午後4時から民宿「たちばな」で開かれ、約50人が参加した。丹波山村の人口からすれば、大変な参加者数であった。祝賀会には、中川翁の血縁者として、八王子から木下文教さんが参加した。木下さんは、中川翁の妹（“とめ”）さんのお孫さんに当たる。中川翁は、大叔父に当



再建なった石造りの中川神社の前で行われた神事
(右の木造の祠はこの後取り壊された)

たるのであろう。

筆者は、丹波山村に伝わる昔話に題材を取った紙芝居「口のない山姥」を上演し、「丹波山村は、民話の宝庫。岩手県の遠野市に似て、未発掘の民話が沢山埋まっている。将来は遠野市と姉妹都市提携を結び、“関東の遠野”になって欲しい」と希望を述べたのだった。

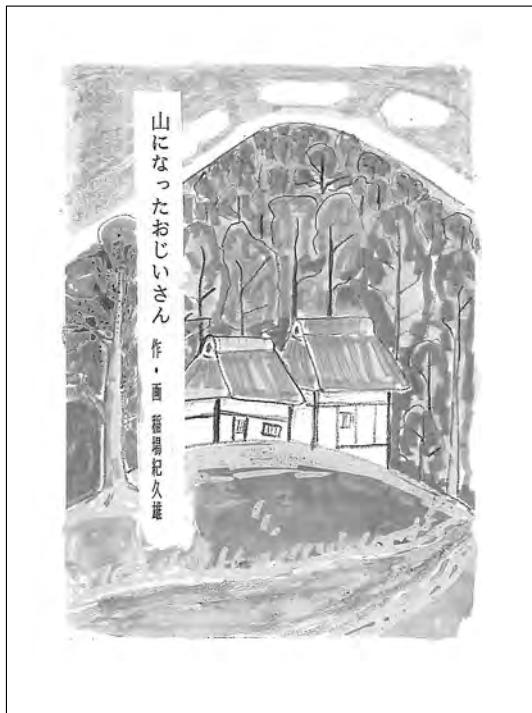
『中川翁を偲ぶ会』は、2002年から5年間、毎年11月23日と24日上下流共催で開催された。筆者は、「偲ぶ会」のために丹波山村の民話を古老の木下勲さんの協力を得て、毎年一つ発掘し、紙芝居に仕立てて上演した。率直に言って、それは筆者にとって楽しい作業であった。紙芝居は、シンプルだが、童話にも、演劇の台本にも、映画のシナリオにも容易く変形できる。

筆者が製作した中川翁追善紙芝居のタイトルは以下の通り。

第一作：山になったおじいさん／第二作：口のない山姥／

第三作：龍魂淵の伝説／第四作：御霊の滝／第五作：飛龍と三本足の馬

丹波山村は、山間の“日陰の村”だが、何百年と不思議な民話を伝承してきた事実により圧倒される思いであった。



(10) 多摩川源流山里友の会の顛末

文化研は、「中川翁を偲ぶ会」を5年間、丹波山村有志と共催したが、開催の主体は文化研側に傾いていた。このため永続性の観点から丹波山村側に主体性を持ってもらう方が望ましいと考えられるようになった。

これは、その後の経過を考えると、いささか早計であったようである。しかし、この時は、「丹波山村側が主体的に開催し、文化研に参加を呼び掛けてもらえれば、永続性の観点からも適切だ。文化研は、手を引くわけではない」と考えていたのである。だが、この時以降、「偲ぶ会」はそれまでのようには開催されなくなった。藤森さんには、連絡があったのかもしれないが、何故か筆者

には届かなかった。筆者もまた、「水循環基本法（以下「基本法」）制定運動」に挺身し、多摩源流を訪ねる機会も無かったのである。

筆者は、基本法制定の実現の目途が立った2014年の春のある日、何年振りかで丹波山村の民宿「たちばな」に泊り、伊藤巖さんにお目にかかった。伊藤さんは、「偲ぶ会」の開催について気にしていたが、ご自身が何年か前に脳溢血に倒れ、筆者が訪ねた時は、車椅子に頼る状態であった。

私達は、旧交を温め、上下交流について話し合った。こうした話し合いの中から「多摩川源流山里の会（仮称）」の創設構想が生まれた。

筆者の脳裏には、次のような願いがあった。

“基本法は、「河川流域全体の水循環の健全化」を謳っており、上下流交流の推進が今後は重要課題になる。多摩川源流域をモデルに「上下流交流を如何にして進めるか」を改めて検討すべきではないか”

同時に、上下流交流を源流域の産業振興と結び付けたいという思いも甦って来た。単なる山登りや温泉、山女釣り、あるいは郷土芸能などの同好会や情緒的結びつきでなく、源流域の山の幸を下流域の人々に消費してもらう中で、日常生活と結びついた流域一体感を醸成したい。こうした思いである。

私の脳裏には旧友渡辺勝久氏の姿があった。渡辺さんは、基本法制定運動を通じて文化研の活動に加わったのだが、事業経営のセンス豊かな経営者だった。それに、現在埼玉県在住で、有機食材業界で活躍している私のゼミ卒業生高平誉之君の姿も浮かんだ。彼なら源流の山の幸の流通に協力してくれるだろう。また、輸入果実の流通に携わっている旧友の姿も明滅した。さらに、基本法制定運動を通じて知り合った東京都下の生協の協力も得られそうに思えた。伊藤さんも大賛成だと言う。筆者の脳裏には様々な構想が去来した。

渡辺さんは、直ちに「多摩川源流山里友の会発起人準備会」を結成し、代表に藤森さんが就任した。山里友の会は、2014年4月22日設立され、会則は6月1日から適用された。会の目的は、次の通りである。

「第3条（目的）本会は、多摩川源流の山里の人々と下流地域の人々が、多摩川を介して友好を深め、互いの長所を活かして相互に助け合い、多摩川の恩恵を享受するために設置する。」

藤森代表、渡辺幹事及び関係者数名は、友の会設置後の6月28日、丹波山村当局を訪ね、友の会結成を報告すると共に、次の5項目の提案を行った。

- ① 中川翁を偲ぶ『山の御爺祭』を毎年秋に開く。
- ② 「山の幸」の購入を希望する友の会会員に特別価格で提供する。
- ③ 多摩源流の笠取山、飛龍山、黒川鶏冠山などの登行会を毎年開催する。
- ④ 郷土芸能を見る会、伝説や民話などを聞く会を毎年開催する。
- ⑤ 水源林を守る山仕事の体験会を毎年開催する。

村長はじめ有力村会議員が説明会に列席したが、藤森代表、渡辺幹事ら友の会側の説明に対する彼らの反応は、冷ややかで後退論ばかりであった。さらに、その後行われた丹波山村の古老との協議も同様で、最終的に「中川翁記念祭」開催でさえ決められず、2014年開催を断念する破目になった。

藤森―渡辺ラインは、村議会議員の冷ややかで非礼な対応に、その真意を計りかねた。過去の村長選挙の経緯などが原因かもしれないと推測したが、真意を把握できないまま、2015年11月7日、

甲州市落合（多摩川源流）の源水館において「2015年中川金治翁祭」を開催した。源水館は、中川翁が定宿にした旅館で、今も中川翁の大きな肖像写真が座敷に掲げられている。この催しが友の会最後の行事になろうとは誰も思い及ばなかった。今思えば、落合の主で、中川翁の崇拜者・曾根良一氏が金治翁祭の少し前に逝去していた事実が何かを暗示しているように思える。

藤森代表、渡辺幹事は、その後も丹波山村の若手後継者に接触し、ジビエ料理に鹿肉を提供する販売ルートを紹介したが、返信は無く、丹波山当局の対応は、友の会の活動を冷え込ませ、遂に解散に追い込まれるに至ったのである。

かくして、およそ30年に亘った文化研の多摩川上下流交流活動は、ピリオドを打った。筆者は、上下流交流は、単なる情緒ではなく、日常生活と結び付いた形で行われるべきだと思う。それには、下流域が源流域の産業振興に寄与することが必要である。源流域には、山の幸があり、さまざまな資源がある。上下流の人々が交流する中で、それらが流域内で流通し、消費されることで、源流域の人々の生活が安定的に成立することが重要ではないか。これは、いわゆるボランティア活動の領域を超えているかもしれない。上下流交流の活性化は、この難問の打破に懸っているのではないか。文化研に突き付けられた大きな課題である。

（稲場紀久雄、渡辺勝久）